

一

後の問いに答えなさい。(二十点)

問 次の四字熟語は、それぞれ一字誤っています。その漢字をぬき出し、それぞれ正しいものに直しなさい。

- ①意味身長 ②不和雷同 ③短刀直入 ④起死会生

問 次の慣用句とその意味を見て、() 内に入る体の一部を表す漢字一字をそれぞれ書きなさい。

- ⑤ () が折れる … 苦労をする
⑥ () を明かす … 相手を出しぬいておどろかせる
⑦ 猫の () … たいへんせまい場所

問 次の熟語の、二つの漢字はどのような関係になっていますか。後のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ⑧安易 ⑨明暗 ⑩日照 ⑪水面

ア 似た意味の漢字を並べたもの

イ 反対の意味の漢字を並べたもの

ウ 上の字が下の字を修飾(しゅうしょく)するもの

エ 下の字が上の字の目的語(「を」「くに」)になるもの

オ 上の字が主語、下の字が述語になるもの

問 次の文の様子に当てはまることわざや慣用句を、後のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

⑫ チームの監督とコーチの意見が食い違い、チームの作戦が統一できずに負けてしまった。

ア 船頭多くして船山に上る

イ 顔に泥をぬる

ウ きまりが悪い

エ 寄らば大樹の陰

オ 溺れる者は藁をもつかむ

⑬ 「栄養のある物を食べるべきだ。」と言っていた友達が、おやつばかりを食べていて食事の量をへらしていた。

ア 飛んで火に入る夏の虫

イ 釈迦に説法

ウ 医者の不養生

エ 枚挙にいとまがない

オ 爪に火をともし

問 次の文章の——線部⑭～⑯を、正しい敬語に直しなさい。

先生、お久しぶりです。お元気ででしょうか。

私が小学校を卒業してから、早くも半年がたち、中学校という新しい環境にも慣れて、部活や勉強に打ち込んでいます。先生は私たちの卒業式の日、「他人のことを気にせず、自分が誇れる大人になりなさい」と⑭申しました。最近その言葉の意味がわかり始めたように思っています。先生は今年、小学校を退職されて、写真家になられる予定だと聞きました。今度、先生の撮られた写真を⑮ご覧になりたいと思っています。また、近々個展を開かれると聞きましたので、そちらにも⑯行きます。先生とお会いできる日を楽しみにしています。

問 日常の中で用いることばの中には、正確に表現しなくても通じるものがあります。次の——線部の表現を、例にならって、より正確な表現に直しなさい。

例…「ヤカンがわいた」↓「ヤカンの中のお湯がわいた」

⑰ ^{かれ}彼は今、^{なつめそうせき}夏目漱石を^{らん}読んでいる。

⑱ 向こうから^{ぼうし}麦わら帽子が歩いてきた。

問 次の文章はAを前提としてBを導いています。この展開には誤りがあるといえますが、それはなぜですか。その理由として最も適切なものを、後のア～オの中から一つ選び、解答欄⑲にその記号を答えなさい。

A カラスは黒い。そして、カラスは鳥である。よって、B 鳥は黒い。

ア カラスは黒いと断言してしまっているが、白いカラスもいるかもしれないから。

イ カラスが黒いからといって、鳥であるとは限らないから。

ウ 鳥には様々な種類があり、ハトやニワトリなどもあるから。

エ 私たちには黒く見える鳥だとしても、毛がぬけたら黒くないかもしれないから。

オ カラスは黒い鳥だが、カラスの他にも黒い生き物はいるから。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文の表記を一部変更しているところがあります。)(五十点)

「賢いヒト」を意味するホモ・サピエンスや、「作るヒト」を意味するホモ・ファベルと同様、①ホモ・ルーデンスとは「遊ぶヒト」を意味する言葉だ。それをそのままタイトルとした本のまえがきで*ホイジンガが言うように、「およそ人間の認識しうる底の底まで掘りさげて考えてみるならば、すべて人間の行なうことは遊びにすぎないようにみえると証明してゆく考えは、古くから行なわれていたものであった」。そして彼自身のうちでも、「人間文化は遊びのなかにおいて、遊びとして発生し、展開してきたのだ、という確信」がしだいに強まって、しまいにはこの本を書くことになったのだという。

ここでは、ごく簡単にこのaメイチョを要約しておきたい。すでに、霊長類学者の山極とともに見たように、ホイジンガもまた「生活維持のための直接的な必要を超える」という遊びの特徴に注目している。彼はまずこんな問いを立てる。
「いったい遊びの面白さというのは何だろう? なぜ、赤ん坊は喜びのあまりきやつきやつと笑うのか。なぜ*賭博師はその情熱にのめりこんでしまうのか。」②運動競技が何千という大観衆を熱狂に駆り立てるといえるのは、どうしてなののだ?

そして、彼はこの問いに答えるかわりに、問いそのもののなかに遊びの本質を見出すのだ。

「じつはこの迫力、人を夢中にさせる力のなかにこそ遊びの本質があり、遊びに最初からbコユウなあるものが秘められているのである」というのも、③遊びは、理性的存在としてのホモ・サピエンスが「単なる理性的存在以上のものである」ことを示している。合理的な思考では、ふつう、原因と結果という因果関係で物事を説明しようとする。(A)、ホイジンガによれば、因果関係を越えたところにこそ遊びの遊びたる所以がある。だから遊びは合理的説明をすりぬけるのだ。その意味で、遊びとは必要以上のもの、ホイジンガの言葉で言えば、「余計なものにすぎない」。そして、だからこそ、それはこの上なく大切なものなのである。

この「余計なもの」を学校教育の中心にすえたのが、「子どもの村」と呼ばれる全国に五つの学校である。その創設者で学園長の堀真一郎は、④「遊びたいと思わない」子どもの増加という現象に、現代社会の危機の深刻さを見ている『きのくに子どもの村の教育』。なぜ、子どもが遊びたいと思わなくなると問題なのだろう? この問いに答えるには、そもそも、「子どもはなぜ遊ぶのか」と問う必要がある、と堀は言う。子どもはなぜ我を忘れて遊びに夢中になるのか。子どもにたずねれば、ほとんどの子は「楽しいから」と答えるだろう。

(B)、なぜ、遊びは楽しいのか?

遊びが楽しい理由として堀は、Ⅰ 心身の爽快感、Ⅱ 成長の喜び、Ⅲ 自由の三つを挙げて、それぞれ次のように説明する。

Ⅰ 「遊びに夢中になると、えもいわれぬ心地よい疲れを感じる。心ゆくまで遊んだあとのこの爽快感こそ、遊びの最も直接的な魅力といつてもいいかもしれない」

Ⅱ 「遊びの中には、適度の難しさがある。あるいは競争がある。たとえ一人遊びであったとしても、昨日はできなかったことが今日はできたという満足感がある。この満足感が得たくて、子どもは難しいことに挑戦する。挑戦し、その結果として『力がついた』とか『大きくなった』という実感が味わえる」

Ⅲ 「遊びはなんといっても自由な活動である。何から自由か。まず、第一に物理的な制約からの自由がある。小さな子どもでも、遊びの中ではスーパーマンにでも、おひめさまにでもなれる。また、小さな石ころ一つがダイヤモンドになり、棒切れ一本が魔法の剣になるのだ。（中略）第二の自由は、大人からの指図や評価からの自由だ。遊びに夢中になっている時、子どもは大人の目を気にしない。遊べと命令されて遊ぶわけでもなければ、点数で評価されることもない」

遊びたいと思わない子どもはこれら三つの楽しさを知らないからだと思われる。心身の爽快感も、成長の喜びも、自由も、それを経験したことの無い子どもには、不安や恐怖をかきたてるものとなっても不思議ではない。「子どもの村」学園に「ふつうの学校」から中途転入してくる生徒のなかには、教師からの指示がないとなかなか動けない者が多いという。教員（「子どもの村」では、「先生」ではなく、「大人」と呼ぶ）に向かって、「何をしてほしいか、言ってくればいいのに」と不満をもらす子どもたちもいるそうだ。

「世界一自由な学校」として知られるサマーヒル・スクールの創設者A・S・ニールを師とあおぐ堀は、⑤夢中で遊んでいるときの子どもを、師の言葉を借りて「自分自身の魂の船長」と呼ぶ。一方、遊びたがらない子どもたちが増えている現象を、社会心理学者のエーリッヒ・フロムの言い方にならって、現代版の*「自由からの逃走」としてとらえる。事態は子どもに限るまい。子どもたちから遊びという根源的な欲求をうばってきた大人たちもまた、遊びの楽しさを忘れ、成長をあきらめ、自由をおそれて、そこからにげてきたのではないか。そしてその魂は、船長のいない船に乗って、どこか遠いところへ押し流されているらしいのだ。

さて、話をホイジンガに戻そう。

遊びは「生物学的にも論理的にも完全に定義することはできない」としつつも、ホイジンガはその本質を示す特徴を列挙している。そのうち、特にぼくたちにとって重要だと思われる点をいくつか挙げてみよう。ひとつは、遊びは自由な行動だ、ということ。それは身体的な欲求から行なわれるのでも、義務によって強いられるのでもない。遊びたくてたまらない、というときも、「遊びによって満足、楽しみが得られる」というかぎりにおいて、遊びへの欲求が切実になる、というだけの話である」。

次に、⑥遊びは日常の外側にある、ということ。「日常生活から、ある一時的な活動の領域へとふみ出していくもの」だということは、子どもでもよくわかっている。これは生活そのものではなくて、単なる遊びにすぎないという意識をもってはいても、しかしだからといって、遊びが、ふまじめで、いいカゲンで、くだらないものだとは限らない。それどころか、生活よりもっとまじめで、夢中になりすぎて、*恍惚状態におちいることさえあるのだ。

「日常の外」という意識と関係して、空間的にも時間的にも、遊びにはここからここまでが遊びだという限定性がある。はじめがあり、終わりがあある。その限定の中で、「プレイ」されるということも遊びの特徴だ。周囲から隔離されたその時空間は、その内側にいるものにとつては、そこにだけしかないような、きよめられて、特別な力をおびた、神聖な場となる可能性さえ秘めているのである。ホイジンガによれば、遊びの時空間のなかにいる者にとって、「遊びは秩序そのもの」だ。そして「どんなにわずかなものでも、秩序の違反は遊びをぶちこわし、遊びからその性格をうばい去って無価値なものにしてしまう」。

また、遊びが「日常の外」にあるということは、「必要や欲望の直接的満足という過程の外」にあつて、日常生活に浸透している利害関係を超えているということでもある。ホイジンガが言うように、何か別の目的に仕えるのではなく、「それだけで完結している行為であり、その行為そのもののなかで満足を得ようとして行われる」のも、遊びの本質的な特徴なのである。

さて、「不要不急を避ける」ことがスローガンのようになった世界では、「自分は不要不急の存在ではないか」という不安がじわじわと広がっているように見えた。そんなとき、こうした不安にしっかり向き合うためにも、「遊び」がいよいよ重要になってきている。(C)、遊びは、ホイジンガが言うように、「要」や「急」で動いている日常世界の外側につくりだされる一種の聖域だからである。その本質は、「要」や「急」という言葉で表される経済的利害を超えたところに憩うことにある。

⑦「いつそのこと要からも急からもういったん解放されてみてはどうか」と、僧侶の阿純章は提案する。不要不急を避けるのではなく、逆に不要不急を受け入れてしまおうというのだ。つまり、遊ぶのである。利害、損得、義務、責任などからなる世間の枠組みからいったんはなれて、そこではムダで、無用で、不要で、役立たずだとされてきた物事を、だきしめてみるのだ。不要不急も、ムダも、遊びの別名である。

遊びとは、ぼくたち人間にとってのもっとも根源的な故郷のような場所だ。

(辻信一『ナマケモノ教授のムダのてがつく』さくら舎)

*注 ホイジンガ＝オランダの歴史学者。

賭博師＝賭け事で生計を立てている人。

「自由からの逃走」＝社会心理学者のフロムが、第二次世界大戦前、なぜドイツの人々がナチスを支持したのかを分析したもの。フロムは、本来自由という

ものは、それによって生まれる孤独や責任をも受け止める覚悟が求められるものだが、当時の社会においては人々がそれらを受け止められず、結果として権威による支配を求め、権威へ服従するような「自由から逃走」する状態になってしまったと分析している。

恍惚＝ある物に心をうばわれて、うっとりする様子。

問一 a d のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 (A) (B) (C) に入る最も適切な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使ってはけません。

ア しかし イ なぜなら ウ では エ だから

問三 —線部①とありますが、筆者がこのように述べている意図として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「賢い」や「作る」と同じように、人間進化を「遊ぶ」と関連づけると、人間特有の性質を失ってしまうことを示そうとする意図。
イ 「賢い」や「作る」に、「遊ぶ」という行動が加わることで、人間は他の動物と異なる進化をしてきたことを示そうとする意図。
ウ 「賢い」や「作る」という力を持ったことで、人間にとって重要な「遊ぶ」という行動が可能になったことを示そうとする意図。
エ 「賢い」や「作る」と並んで、「遊ぶ」という行為が、人間が持っている重要な特性の一つであることを示そうとする意図。
オ 「賢い」や「作る」以上に、「遊ぶ」という行為にこそ、人間にしか見られない特徴がふくまれていることを示そうとする意図。

問四 —線部②について、ある生徒が次のように発表しました。これを読んで、に当てはまる具体的な事例を、考えて答えなさい。

発表

—線部②中の「運動競技」とは、「遊び」を説明するための一つの例です。「遊び」とは、「生活維持のための直接的な必要を超える」ものであり、明確な因果関係のない非合理的な性質を持つものだと言明されていました。このことをスポーツ観戦に当てはめてみると、たとえば、ということですが、これが、「運動競技」の、また「遊び」の本質なのです。

問五 — 線部③とはどういうことですか、その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 遊びは論理的な説明の難しい行動であることから、人間は、一見すると合理的に思考する場合でも自己の信念にもとづいて行動する生き物であるといえ、信念を持つことが「人間」であるための条件になっているということ。

イ 遊びはその行動の要因を合理的に説明できない行動であることから、人間は、合理的ではない何かによって行動する生き物だといえ、その何かを持っていることが「人間」であることの証明となっているということ。

ウ 遊びは明確な因果関係によって説明できない行動であることから、人間は、道理にもとづいて考え行動する生き物だという考えは誤っているといえるが、「人間」であるためには社会における規則に従う必要があるということ。

エ 遊びはなぜ行うのかということが明確に説明できない行動であることから、人間は、道理よりも感情を優先させる生き物であるといえ、それが大自然の中で生きてきた「人間」本来のあり方を実証しているということ。

オ 遊びは科学的に立証することの難しい行動であることから、人間は、表面的には無意味に思えるものも大切にして行動する生き物であるといえるが、「人間」であるためには理屈りくつによって思考する力が必要であるということ。

問六 — 線部④について、後の問いに答えなさい。

(1) 「遊びたいと思わない」子どもは、「遊び」をどのようなものととらえているのですか、本文中から十五字以内でぬき出して答えなさい。

(2) 「『遊びたいと思わない』子どもの増加」が、深刻な現代社会の危機だといえるのはなぜですか、その理由を説明しなさい。

問七 — 線部⑤とありますが、なぜ「夢中で遊んでいるときの子ども」を、「自分自身の魂たましいの船長」と呼ぶことができるのですか、その理由を説明した次の文の□に、適切な言葉を考えて入れなさい。

「夢中で遊んでいるときの子ども」は、□から。

問八 ――線部⑥とありますが、「日常の外側」にある遊びが行われる場に関する説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日常から切り離^{はな}されているが、日常に通じる経験を養うための場であり、人々はまじめに「遊び」に取り組まなければならない。
- イ 日常のある時空間とは別のものであり、その中で「遊び」に参加する者でなくても決してはいけけない神聖な場である。
- ウ 日常生活とは関係のない場であるがゆえに、人々がそのような場は必要ではないと判断すれば、存在できなくなる場である。
- エ 日常から切り離されたところで成立し、遊びを特別で秩序ある場^{ちつじょ}として成立させるために参加者は規則を守らなければならない。
- オ 日常生活と異なる時空間で成立し、日常につかれた人々に定期的に「遊び」を提供し、彼らをいやすことを目的とした場である。

問九 ――線部⑦のように「阿純章」^{おかじゅんしょう}が提案する理由を、筆者はどのように考えていますか、説明しなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五十点)

高校二年生の航大と凜は、親友である。凜は演劇部の部長をしており、来月の文化祭での発表をひかえている。そんな折、凜の不安そうな顔を見た航大は凜のことが心配になった。ある朝、花の水やりに来ていた凜とたまたま出会ったとき、劇の稽古が思うようにいっていないことを凜は初めて航大に打ち明けた。

航大は、じつと凜の横顔を見つめる。苦しそうというより、迷子みたいに心細そうな顔をしている。このまま文化祭当日をむかえれば、演劇部の部員たちは満足するだろう。しかし、それは凜の目指すゴールとは程遠い。彼女の心が満たされることはない。理想と現実とのギャップに加え、部長としての責任感が彼女をむしばんでいる。舞台の成功の線引きをどこにすべきか、決めかねているのだ。

凜がもう一度ため息をはいて、続ける。

「人からきられることがこわいから、仲間外れにされないように周りに合わせて笑って、空気を読まない言葉を口にしないように、いつも神経を張りめぐらせている。その結果、部長なのに部員に演技の要求ひとつできない。他人の目ばかり気にして、ひとりで勝手に思い悩んでいる。滑稽だよ。私はそんなうすっぺらな人間なんだよ」

凜の言葉は、何度も読み上げられたセリフのようによどみなかった。声に出さずとも、ずっとかかえ続けてきた想いだったのだろう。胸の奥底にためこんでいた自らの不満が、せきを切ったようにあふれ出している。

困り果てる友人の横顔をながめていると、a ハラの底から強い感情がわき上がってきた。彼女の助けになりたい、問題解決のための力になりたいという気持ちが全身をめぐり、体が熱を持ち始める。自分の中にある目に見えない何か、I アクセルがふみこまれるのを待つ車のように振動している。

突然の衝動に航大はおどろくが、とまどいはなかった。なつかしい。自分はこの感覚を知っている。*サッカー部をやめる前、悩むことがきらいだった自分は、いつだって思いのままに行動していた。

「うすっぺらじゃないだろ」

余計な一言は（A）彼女を b キズ 付けることになるかもしれないと知りながら、航大は反論した。指摘せずにはいられなかった。

凜が航大に視線を向ける。彼女は痛みにたえるように眉根を寄せていた。こい黒色の * 双眸が、なぐさめの言葉などいらないと拒絶している。

① 自分が刃物を手にしているような気分になり、航大は息をのむ。これから口にしようとしている言葉は、果たして本当は彼女のためになるのだろうかと不安になる。口を閉ざし、沈黙に身をゆだねたくなった。

腰に手を置き、大きく息をはく。サッカーをしていたころ、PKをける前に必ずやっていた*ルーティンだ。肺の中の空気と一緒に、不安と弱気を体外へと追いやる。緊張がほぐれ、心が落ち着いてた。

一度口から出た言葉をなかつたことにはできない。勢いに任せて、航大は続ける。

「誰にたのまれたわけでもないのに早起きして学校の花を世話しているような人間が、うすっぺらなわけがない」

「そんなの、たいしたことじゃないよ」

謙遜ではなく、本心からそう思っているのだろう。② 凜の声には、つき放すようなとげとげしさがあつた。

ひるまずに、航大は言葉を重ねる。

「おれが同じことをしていたら？」

「え？」

「おれや他の誰かが凜と同じことをしていても、たいしたことじゃないと思う？ それくらい普通のことだ、って」

「それは……」

凜は言葉につまり、困ったように眉をひそめた。Ⅱ 沈黙が、彼女の答えを雄弁に語っている。他人に優しく、自分に厳しい。それは立派な

心持ちだが、それ故に自らの美点を素直に受け入れられないことは、彼女の明確な欠点だ。Ⅲ 屋根より高いハードルを見上げて嘆息するなんて、それこそ滑稽だ。

i プランターに植えられた花の姿が頭にうかんだ。一見すると美しいその花も、よく観察してみれば、さき終わり、かれた花をいくつもその身に付けたままにしている。重苦しく、つらそうだ。

いまの自分に、彼女の悩みを解決する力はない。しかし、③ 彼女がかかえている不要なものを取り除くことくらいなら、自分にもできるのではないかと航大は思う。*花がらをつむように、不当に彼女の心を重くしているものたちを、ひとつひとつ取りはらう。それも、彼女の力になるということではないだろうか。

「誰だって人からきらわれることはこわいよ。おれもそうだ。いまだって、自分の行動は凜にとって迷惑なんじゃないかって不安になって

る」

「そんな。迷惑なんかじゃないよ」

両手を大きく左右にふり、あわてた様子で凜が否定する。その大げさな仕草が（B）いつも通りで、航大は少し緊張がほぐれた。
普段の^{ふだん} C メイロウ 快活な姿を、凜は本当の自分ではないと言った。でも、とつさに顔を出した彼女の一面は、航大のよく知る彼女だった。
やはりその顔も、彼女を形づくる一部なのだ。たとえ演じていたものであっても、いつわりではない。そのことにホッとした。

肩の力がぬける。重く考えることなんてないのではないかと思えてきた。普段通り、IV 軽口のキャッチボールをするみたいに、思い付きを口にすればいい。それくらい気楽な方が、相手だって変に緊張しないで受け止められる。

「なあ、無責任な提案をしてもいいかな」

凜がげんなり顔で航大を見る。

「無責任な言葉なら、あんまり聞きたくないんだけど」

「それならやめとくよ」

航大があつさりと引き下がると、凜はムツとして唇をとがらせた。

「そんなふうに言われると、かえって気になっちゃうでしょ」

「それじゃあ、聞いてみる？」

かすかに* 逡巡^{しゆんじゆん}するような間を置いてから、凜が首を^d タテにふる。

「聞くだけ聞いてあげる」

航大はうなずき、天井を見上げるようにして口を開く。

「今日の部活、休みにしたら」

期待外れの提案に失望したように、凜の表情がくもった。

「それは無理。ただでさえ稽古がうまくいってないのに、もう本番はすぐそこなんだよ。休んでる余裕なんてないって」

「でも、いまの状態で稽古したって意味がないんじゃないか？ 部員は現状に満足していて、凜はそこに注文をつけられないでいるんだろ。

それじゃあ改善のしようがない」

淡々とした口調で航大が指摘すると、凜は口を閉ざしてうつむいた。彼女自身、そのことは痛いほど理解しているのだろう。

「休めば改善するってものでもないと思うけどさ、おれの知り合いの役者さんが言ってたんだよ。『適度に休まないと、良い芝居なんてできない』って」

凜が口を開くが、言葉を発するよりも先に、何かに気付いてかたまった。眉をひそめて、航大をにらむ。

「それ、私が言った言葉でしょ」

航大が笑みを深める。

「正解。よく気付いたな」

以前この場所で、彼女が言っていた言葉だ。雑談の中の軽口のひとつだが、まちがっているということもないだろう。休息は大事だ。陽が出ていないときに ⁱⁱ * ガザニアが花を閉じるのは、もちろん裏表があるからなんて理由ではない。それはきっと、余計なエネルギーを使わないようにするためだ。美しくさき続けるために、体を休める必要性を知っているからだ。

「気付くよ、それくらい。私をばかだと思ってるの？」

「まさか。天才だと思ってるよ」

「ばかにしてるでしょ」

「多少ね」

「そこはうそでも否定しなさいよ」

凜はムツとして眉根を寄せるが、くだらないやり取りにあきれたように、唇の端はかすかにつり上がっていた。雑談に興じているときの、いつもの調子だ。

彼女はじょうろをシンクの上に置き、思索するように腕を組む。

「休みねえ。休んだところでアレコレ考えちゃいそうだけど」

「アレコレ考えればいいさ。そして、今日で結論を出せばいい。このまま本番をむかえるのか、部の皆にもっと良いものを目指そうと提案するのか。結局のところ、問題はそこだろ」

凜は眉を八の字にする。

「それを決められないから、困ってるんだけど」

「だから、決めるためにもう一度、よく考えるんだよ。だいじようぶ。どんな結論を出そうと、部員の皆は受け入れてくれるって」

無根拠むこんきょで無責任な言葉だな、と航大は自分でも思う。ただ、V根拠こんきょはなくても、自信があつた。皆が凜をしたうのは、彼女の優やさしさにひかれたからだ。その優しさは、決して演じられたものではない。人知れず自主的に校内の花の世話をするような女の子が、演技の要求をするくらいのもので、きらわれるわけがない。

「あんた、*そうた 壮太そうたくらいしかうちの部員に知り合いいないでしょ」と凜が唇をとがらせる。

「それじゃあ部員のことをよく知っている凜にきくけど、演劇部の皆さんは、部長にもっと上を目指そうと言われて、（C）話も聞かずに不満を口にするような連中なのか？」

「そんな人はいない、けど……」

凜は答えるが、なおも不安そうだった。一度うかんだ悪い想像は、簡単にはふりはらえないのだろう。

④ 航大は大げさなまでに背中を反らし、自分の胸をドンとたたいてみせる。

「だいじようぶ。どうしても決められないんだったら、おれが決めてやるから」

「何でコウが決めるのよ」と凜が冷めた声で言う。

「だって、自分じゃ決められないんだろ？ どうせ決められないのなら、おれが決めたっていいじゃないか」

いいわけないでしょ、と凜があきれ顔で*かぶりをふり、両手を上げて伸びのびをする。太陽から活力をもらうように、窓からさす陽光を全身で浴びる。

「あーあ。何か、あんたとアホな会話をしていたら、色々と悩んでいた自分がばかばかしく思えてきちゃった」

やや芝居がかったその口調は、航大へというより、自分自身を*叱咤しっただしているように感じられた。

「もう悩む必要はないぞ。おれに任せておけ」

「無責任男をたよるつもりはありません」

凜はキツパリと言い放ち、いどむように航大を指差して（D）笑った。

「あんたに決められるくらいなら、自分で決める」

航大は笑顔で肩をすくめる。

「できるといいな」

「おかげ様で、意地でも自分で決めてやろうって気になったよ」

⑤ さわやかな笑顔をうかべて、凜はいたずらっぽく舌を出す。軽やかに e センゲンしたその声に、かげりの色はもうなかった。

(真紀 涼介『まきりようすけ勿忘草をさがして』東京創元社)

*注 ギヤップギヤップ 大きなずれ。

サッカー部をやめる前そうぼう 航大は昨年ケンカに巻きこまれ、好きなサッカー部をやめざるを得なかった。

双眸そうぼう 両方のひとみ。

ルーティン 決まりきった手順。

花がら 花のことで、花の生育にとっては好ましくないもの。

逡巡しゆんしゆん 巡るためらう。

ガザニア 人が見ている太陽が出ている時だけ明るく花を開き、夜には花を閉じると以前凜が教えてくれた。

壮太そうた 演劇部の部員で、航大の友達。

かぶりをふり 頭をふって承知しない。

叱咤しつた している しっかりつけるように、はげましている。

問一 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 (A) (B) (C) (D) に入る最も適切な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使ってはけません。

A 不敵に B ほがらかに C ろくに D 余りに E さらに

問三 — 線部①とありますが、ここからうかがえる「航大」^{こうだい}の心情を説明しなさい。

問四 — 線部②とありますが、ここからうかがえる「凜」^{りん}の心情を説明しなさい。

問五 — 線部③とは何ですか、わかりやすく説明しなさい。

問六 — 線部④とありますが、なぜ「航大」はこんな態度を取ったのですか、その理由を説明しなさい。

問七 — 線部⑤とありますが、このときの「凜」の様子^{ようし}の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 航大の言葉を完全に受け入れることはできないが、明るさを前面に出すことに自分らしさがあることだけは理解し、自分を励^{はげ}ます心の内に気づかれないように礼を言っている。

イ 自分の弱さを受け入れることによって悩み^{なや}を乗り越^こえたとはいえ、結果的には航大の的外れなアドバイスに強く影響^{えいけい}されていたことに気づき、苦笑^{くしやう}を隠^{かく}しつつ礼を言っている。

ウ 負けず嫌^{きら}いの自分が今回の劇に関しては自信が持てず悩んでいたが、航大に助けってもらうことはより大きな混乱を招くと考え、明るい表情を作^{つく}って形式的に礼を言っている。

エ 航大の滑稽^{こっけい}とも思えるアドバイスに、部員のことを必要以上に気にかけて悩んでいた自分自身が逆に愚^{おろ}かに見え始め、感謝の言葉の裏に皮肉^こを込めながら礼を言っている。

オ 悩みが吹^ふつ切れると同時に、航大の軽口が自分を気遣^{きづか}ったものだったことにも気づき、部員の視線を気にしすぎていた自分が恥^はずかしく、照れながらも心から礼を言っている。

問八 次にあげるのは、――線部 i・ii について、ある生徒が先生に質問し、先生が答えている場面です。☐ X、☐ Y に適切な言葉を入れなさい。ただし、☐ X は本文中の一文をぬき出して最初の五字で答え、☐ Y には自分で考えた二十字以内の言葉を入れなさい。

生徒…先生、登場人物の凜がいつも学校で花の世話をしているというストーリーに合わせているのでしょうか、本文には花に関する表現がいくつかありました。そのうち私は「プランターに植えられた花」と「ガザニア」が気になっています。

先生…どう点が気になっているのですか？

生徒…「プランターに植えられた花」は、美しく見えても、「かれた花」を「身に付け」ており、「重苦しく、つらそう」なんですよ。一方の「ガザニア」は太陽が出ているときは花をさかせて、夜は花を閉じている。これらの表現には共通点があるような気がして……。先生…おもしろいところに着目しましたね。これらはともに凜と重なっていると考えてみてはどうでしょう？ つまり、表面的には明るく見える凜ですが、今は「重苦しく、つらそう」なんですよ。これが「プランターに植えられた花」に凜が重ねられているという意味です。☐ X」とあるように、航大はそのような凜を救い出したいと考えていました。そしてその後、凜がさまたまに考えて前へと進めなかった時間も、ガザニアのように凜にとっては☐ Y になるように努めているのではないのでしょうか。

問九 本文について、後の問いに答えなさい。

(1) ……線部 I～V についての説明として適切ではないものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ……線部 I は、凜のためにできることをしてやりたいという航大の思いが、自分でもおさえきれないほど急激に強くなっていることを表している。

イ ……線部 II は、はつきりとした意思是示さなくても、凜は自分の言葉を認めているにちがいないという、航大の確信する気持ちを表現している。

ウ ……線部 III は、どうやっても到達することができない目標を自分で設定したうえで、そこから目を背けようとする凜の傾向を表している。

エ ……線部Ⅳは、意識的に強い口調を用いたり、優しくなだめたりするのではなく、明るい口調でただ会話を交わし続けることを表現している。

オ ……線部Ⅴは、凧と演劇部員の間の問題だと知りつつも、部員の考えを確認する必要などないという、航大の凧に対する強い信頼を表している。

(2) 本文の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 航大は、凧の様子をうかがいながら、明るさの中にも時に口調や態度を変えることで、彼女の苦しみを少しずつ取り除こうとしている。

イ 航大は、凧のために口にした言葉がかえって彼女を苦しめたのではないかと思い、話題を変えて普段通りの明るい凧に戻そうとしている。

ウ 航大は、わざと凧に気楽で無責任な言葉を投げかけることで、ふざけた態度をとる航大には任せておけないと凧に思わせようとしている。

エ 航大は、悩み苦しむ凧に対して冷淡な態度をとり、あえて彼女を見下すような発言を繰り返すことで、凧のやる気を引き出そうとしている。

オ 航大は、凧の助けになりたいという思いを隠しながら、彼女が自分自身の力で現在の状況から抜け出すことができるように仕向けている。

(このページで、問題は終わります。)